

算命学中庸

【初年】 53 回目

53 回目の授業はこのページからです。

授業科目 【大運法】 ①

【初年】 53 回目 【大運法①】 01

□ 大運法 ① (たいうんほう)

大運法は500年ほど前に作られたとされています。
技法としては比較的新しいと考えられています。
それでも約500年の歴史があります。

大運法の成立

人間が共同生活を営む際には、人間関係および社会的な環境が影響します。

家族、仲間、会社、職業、地域、あるいは共通の政治理念をもった政党、国家、そして時代背景などがあります。

そのなかで最も身近で、最も影響を与える人間関係は親・兄弟・配偶者・子供など、家族だと思えます。

社会的環境は、職業、地域、政党、国家、時代的背景などです。

地域としては、都会、あるいは田舎といわれる農村や漁村になります。

時代的背景は〔動乱の時代〕と〔平和な時代〕に分けられます。

算命学は、人間が此の世に誕生すると、宿命が与えられて、役目が与えられると考えています。

その宿命に多大な影響を与えるのが、人間関係と社会的環境といえるでしょう。

宿命は時代と環境に左右されると考えています。

宿命はなにかといえば、「陽占（人体図）」と「陰占」という宿命を意味します。

そして、宿命を取り巻くように環境があります。

宿命（1）陽占・陰占



環境というのは、いろいろと範囲は広いのですが、おなじ宿命にとっては、つまり、おなじ「生年月日」に生まれた人物にとって、どのような環境が与えられるのかは、人それぞれです。

〔たとえば〕 1本の樹木があったとします。

樹木の宿命 — 1年のなかには四季おりおりの環境がある

植えられた場所によっても環境は異なる

樹木には、一年というなかにおいて、四季おりおりの環境が巡ってきます。

おなじ種類の樹木でも、植えられた場所によって異なる環境が与えられます。

それは樹木に与えられた宿命です。

その宿命を人間でいえば、生まれた家庭ということに

なるわけです。

どの種類の樹木なのか、これも宿命です。

人間でいえば、男に生まれたのか、女に生まれたのかは宿命です。

樹木の環境は、日当たりが良いとか、悪いとか、湿気が多い少ないとか、当然「春夏秋冬」の季節も、樹木の環境だと考えますと、その環境は樹木に多大な影響がおよぼすことになります。

人間でいえば、裕福な家庭に生まれたのか、貧しい糧に生まれたのか、やさしい両親のもとに生まれたのか、そうではない両親のもとに生まれたのか、その環境と当然、生まれて来た子供が育つ過程において、多大な影響を与えます。

春になると発芽して、枝葉は夏に向かって繁茂します。秋になれば枯れ始めて、冬になると落葉を迎えます。

これらの環境は「樹木」が、どこに植えられたのかという宿命です。

樹木の場合はそこから生じて来る運命を切り拓くことはできません。ただただ春夏秋冬の変わりゆく環境を受けだけの運命になります。

それとおなじように、人間も環境に影響されると考えています。

人間にとっての環境といえば、先ほど申しあげましたように、両親の話もあるでしょうし、住む場所の話もあります。

日本のなかでも、東京に住む人と、沖縄に住む人では自然環境が異なります。

あるいは、どこかの地域に地震などの災害が起こると、その地域に住む人達は被害に遭うことになります。

おなじ誕生日の人でも、どこに住むかによって、環境は全く異なる状態になってしまいます。

☞ 樹木と極めて大きく異なるのは、人間は知能をもち、精神性を備え、自由に動くことができる肉体をもっています。それらをつかうことで、自分の運命を切り拓くことができるということです。

個々の人物を取り巻く環境ということを考えますと、

〔たとえば〕社会情勢が「動乱」であるとか、「平和」であるとか、それらの事柄は当然、個人の宿命に影響

をあたえます。

⇒ 環境が宿命に影響を与えるということでは、不安定な社会情勢というような、^{どうらん}動乱の状況のなかで活躍する人も出てきます。それまで冴えなかったのに、災害などに遭ってから、急に元気になる人物もいます。そういうことも起こりますし、あるいは、今まで元気であった人が、災害に遭ったことで、元気・生きる気力を失ってしまうということも起こります。このように、個々の宿命に与えられる環境によって、宿命が元気をなくしたり、元気づいたりということが起こってくるということです。

⇒ これからの勉強で「^{せんてんうん}先天運」あるいは「^{こうてんうん}後天運」という言葉がでてきます。

先天運というのは「宿命」のことです。

後天運というのは「運勢」のことです。

先天運は「宿命」のこと

後天運は「運勢」のこと

後天運は大きく分けて、〔年・月・日・大運〕の4つがあります。つまり、^{うんせい}運勢は大きく分けて4つあるということになります。

ねん
年の運勢を見るものを「年運^{ねんうん}」といいます。

毎月、毎月の運を見るものを「月運^{つきうん}」といいます。

毎日、毎日の運を見るものを「日運^{にちうん}」といいます。

10年間の運を見るものを「大運^{たいうん}」といいます。

＊ ねん
年の運勢を見るもの⇒「年運」

＊ 毎月、毎月の運を見るもの⇒「月運」

＊ 毎日、毎日の運を見るもの⇒「日運」

＊ 10年間の運を見るもの⇒「大運」

〔たとえば〕2019（令和1年）の干支^{かんし}は「己亥^{き い}」です。

「己土^{き ど}の亥水^{いすい}」の年^{とし}です。

これはどなたにも共通した干支です。

地球上に生きている人は誰にでも、2019年（日本では令和1年）とありますが、この1年間は、「己土の亥水」という名称の『気』が宇宙を流動しています。

地球上で生きている全ての人に、「己亥」という運勢が与えられています。

ねん つき ひ
年／月／日の運勢が、どのように各人に影響を与えるのか、それは宿命によって違いますが、年／月／日の運勢は誰にでも共通して与えられているものです。

これから勉強するのは「大運 たいうん」といいますが、大運も各人で異なります。1人、1人違ってきます。

この「大運」は、10^{ねんうん}年運のことをいうのです。

それゆえに、大運では10年間の運勢を観ていきます。

^{ねんうん}「年運」はその年の1年間です。

^{げつうん}「月運」は1ヶ月です。

^{にちうん}「日運」は1日です。

- * 年運〔その年の1年間〕
- * 月運〔1ヶ月〕
- * 日運〔1日〕
- * 大運〔10年運〕 10年間の運勢をみる

この4つの運勢を観るなかで、算命学が1番重要視するのは「年運」と「大運」です。

運勢のなかで一番重要視するのは「年運」と「大運」です。

それはどうしてかといえば……時間の長さ^{ゆらい}に由来しています。

1日や1カ月は時間が短いので〔影響の度合いは少ない〕と考えているからです。

☞ これは運勢の話ではないのですが……。

〔たとえば〕の話として、つぎのようなことがいえるでしょう。

今日1日、忙しく仕事をしたので、身体がものすごく疲れました。

でもそれは2～3日休めば回復します。

あるいは、この1ヶ月間とても忙しかったのであれば、それなりの時間はかかりますけど回復できます。

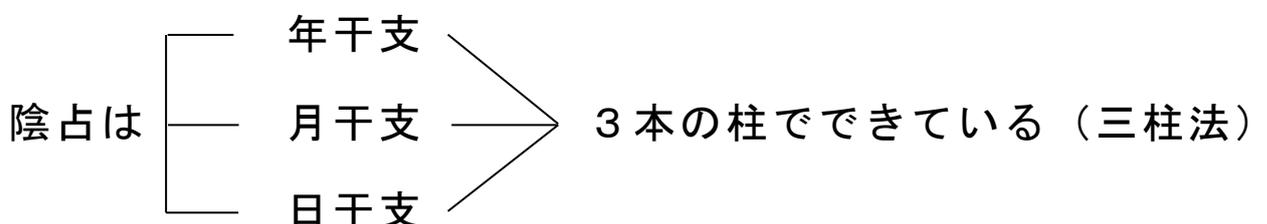
しかし、1年間のあいだ、忙しく身体を酷使したとなると、時間が長期間のために、なかなか回復が進まない……ということが起こります。

そして、疲労が抜けたと思っても、後日、その疲労の影響が出てきて、病気になるとか、なんらかの現象がでてきます。ということです。

このような意味合いで、年連と大連を重要視します。

すでに勉強していまように、「陰占」は年干支と月干支、それと日干支でできています。

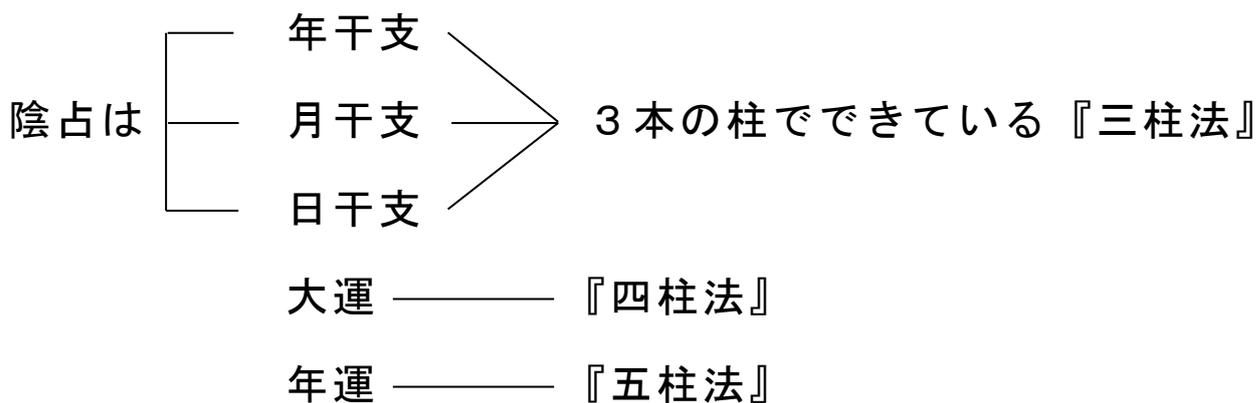
宿命（2）三柱法



「年干支」「月干支」「日干支」のそれぞれを1本の柱と見立てて、3本の柱で出来ていますから『三柱法』^{さんちゅうほう}といえます。宿命を観る技法の1つです。

三柱法は宿命を見る技法ですが、宿命を10年単位で大きく観るときには、もう1つ「大運」があります。三柱法に大運を加えて、宿命を見る技法を『四柱法』^{よんちゅうほう}といえます。

宿命（3）五柱法



もう一つ「年運」を加えると『五柱法』^{ごちゅうほう}といいますが、こういう技法をつかって運勢を観ていきます。

運勢の観方はおなじですけど、それぞれに意味合いは異なります。

細かく観るときには「年運」^{ねんうん}まで観るわけです。

10年間の「大運」^{たいうん}で運勢を観て、そのなかで、また年の運勢を観るという方法をします。

⇒ 10年毎の運勢を観てゆく……大運法という運勢を観る技法が、なぜできたのかというご説明をします。

大運は「10年毎の運勢を観てゆくもの」といいましたが、大運の運勢を知る目的は、未来・将来を見据えることにあります。

「大運」のうごき知る目的は、未来・将来を見ることです。10年毎に自分の未来がどのように変化して行くのかを見ます。どのように移り変わって行くのかを見るものです。

自分の将来、未来が10年単位で、どのように変化していくのかを見る技法です。

これを占法せんぼうに取り入れたとき――、

「自分の未来は、どちらの方向なのか……？」

「自分はどの方向に行けば安全なのか……？」

このことを予測・想定するための〔人生の道標になる〕と考えたのかも知れません。

算命学の占いでは、十二支盤には五方向が配置されています。東西南北の四方向に“中央”を加えています。

東西南北の方向に分ける、つまり縦と横に分けるという考え方は、古代中国においての算命術家が「じゅうおうか縦横家」と呼称された理由でもあるのです。

「人間はどの方向に行けば安全なのか……？」

「人間の未来と将来をあらわ現す方向はどこなのか……？」と考察したことに起因しますが、それを当時のけんじゃ賢者たちが、宇宙という自然に当て嵌めて考えたわけです。

そうしますと、地球は太陽の周りをまわっています。太陽の周りをグルグルまわっていますが、その状態はまるで太陽を目指してまわっているかのようなのである。と考えたそうです。

太陽は東から昇り、南中で頂点に達します。

そして、西へと没していきます。

太陽は毎日、南を目指して、東から昇って来ることになります。

太陽も一箇所に停止しているわけではありません。

どこかへの方向を目指して動いています。

地球は太陽の周りをまわっていますが、その太陽はさらにどちらかの方向へと動いているわけです。

当時の賢者たちは、地球上に住んでいる人間、植物も動物もすべてのものは、太陽の動く方向を目指していると考えたのです。

① 未来

未来というのは、太陽の動く方向である——という考え方をし、その考えが基本になっています。

その太陽の動きは、どこへ向かっているかという、南に向かって動いています。

どうして——南の方角なのかということになりますが、地球上で考えると、太陽は東から昇って、天の南を通ります。

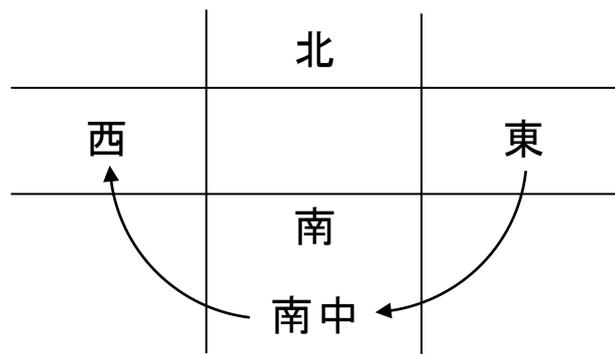
このことを「南中なんちゆうする」といいますが、そして太陽は西の方角へ沈んでいきます。

賢者たちは、太陽が南中するのは、太陽が目指しているのは南だ。という考えをもつに至ったわけです。

それゆえに、南が未来の方向であるとしたのです。

それを人体図に当て嵌めると、下記のようになります。

宿命（4）南中



太陽は南を目指している

② 陰占の世界

ここでは「陰占」の宿命です。

陰占のなかでは、どこが1番、太陽の影響を受けているのかと考えました。

陰占の宿命は「年干支」「月干支」「日干支」の三柱でさんちゅう成り立っています。

宿命（5）年・月・日

① 日 ② 月 ③ 年
干 干 干
支 支 支

三柱は ③ 年 ② 月 ① 日 です。

ねん年・つき月・ひ日をあらわしたときに、この3つのなかで、太陽にもっとも関わり合いの深いのは、どれなのかということになったのです。

☞ 「日干支の1日」という単位は、いちにち太陽の動きを表しているわけではないのです。

太陽の位置そのものを意味していません。

1日という単位は〔地球が1^{いちじてん}自転〕することを表しているわけです。

つまり、日干支は地球が1自転することを意味しています。

日干支は、太陽の位置をあらわしていません。

(地球が1自転することをあらわしている)

☞ ^{ねん}年という単位

これも太陽の動きに、直接影響されているわけではありません。

地球は太陽のまわりを周期的に回っていますけど——

^{ねん}年という単位は、太陽の周りを、地球が1公転することを表しているわけです。

つまり、年干支は地球が1公転することを意味しています。

「年干支」は、太陽に直接影響されていません。地球が太陽のまわりを1公転することをあらわしているのです。

参考・公転〔自分より大きなほかの天体の周囲を、一定の周期で回ること。「月は地球のまわりを公転し、地球は太陽のまわりを公転する」〕

〔惑星・衛星・恒星などが、それぞれ太陽・惑星・ほかの恒星などのまわりを周期的に回る運動〕

🌀 つき 月という単位

つき
月という単位は、太陽と直結しています。

〔たとえば〕（午の月）^{うま つき} といえ、十二支盤上においては、（午）の位置に太陽がいる。ということであらわしているわけです。

それゆえに、「月干支」^{げっかんし} の（月）^{つき} という単位は、太陽に直結しています。

月干支（月という単位は、太陽に直結している）

12月になると（子）の方向に太陽が位置します。
6月になると（午）の方向に太陽が位置していることをあらわしていますから、太陽に最も関わりが深いのは（月）^{つき} だと考えたわけです。

このことを「陰占」で考えますと……。

太陽と最も密接な関係があるのは「月干支」^{げっかんし} です。

（月支）^{げっし} は、十二支盤上で太陽の位置する場所をあらわしています。

ゆえに、（午）の位置を南として、火性の位置としたわけです。

③ 陽占の世界

これらのことを陽占（人体図）で考えますと、人体図には五方向があります。

その五方向の場所には“人物”を配置できます。

☞ 陰占の考えとは別に、陽占（人体図）には過去の場所・現在の場所・未来の場所が決まっています。

宿命（6）陽占（人体図）

	北（過去） 親の場所	
西 配偶者	中心（現在） 本人	東 兄弟・友人
	南（未来） 子供	未来の場所

北は親の場所です。

親の場所は何をあらわしているのかといえば、それは

親から さかのぼ 遡ると過去の人（先祖）です。

つまり、親の場所は過去の場所になります。

中心は本人の場所です。

人間はどなたでも、自分が中心で生きています。

自分が中心で存在しているわけです。

現在、本人は生きている状態ですから、これは「現在」をあらわしています。

〔本人は現在である・自分は現在である〕

しかし、今のこの瞬間がもう未来になっています。

瞬時もおなじ空間にとどまっていません。それゆえに、未来の場所とも考えています。

未来には本人も含まれるとしたわけです。

子供は自分の未来を託す人物たくですから、子供は未来になるのです。

そこで、中央と子供の場所は未来の場所としました。

本人の場所と子供の場所は未来の場所になります。

宿命（6）陽占（人体図）において、未来の場所（子供の場所）がでてくるのは、陰占の場合は「月干支」です。

陰占で「日干」から「月干」をみると、第二命星の子供の場所に、十大主星がでてきます。

「日干」から（月支）の二十八元をみると、本人の場所である主星の場所に十大主星がでてきます。

このように「月干支」は、未来の場所だということです。

宿命（6）陽占（人体図）を見て、わかるように、本人の場所と子供の場所は〔未来の場所〕になります。

☞ 「月干支」が未来の場所です。

陰占宿命では、「日干」から「月干」をみると、第二命星（子供の場所）に十大主星がでてきます。

陰占宿命では、「日干」から（月支）の二十八元の蔵干をみると、人体図の主星に十大主星が出てきます。

参考資料

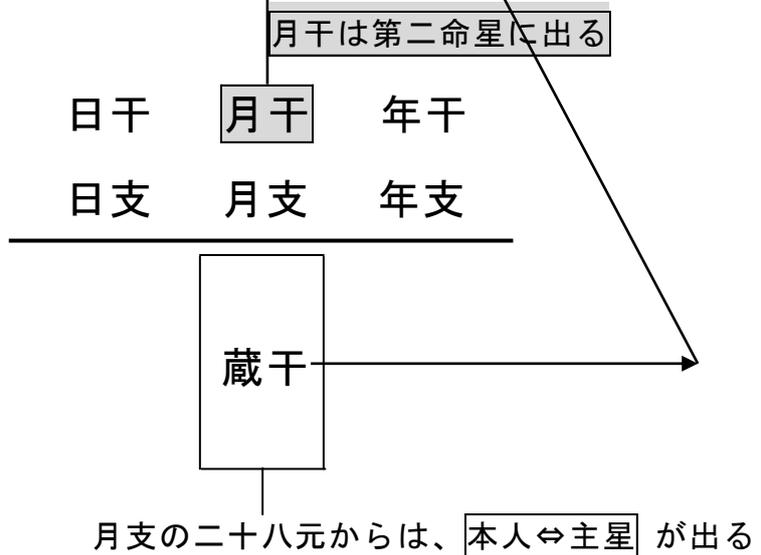
「人体図の場所と陰占」

『大運法①』

陽占（人体図）



陰占



つまり……

(1) 太陽は必ず南中へ向かいますから、太陽の目指す方向は南だと考えました。

太陽の目指す方向は南、その太陽に従って動いている地球も、南の方向を目指していると考えたのです。

(2) そのことを陰占に照らし合わせると、太陽の動きと、最も関り合いの深いのは「月干支」になります

(3) 陽占（人体図）でそのことを考えますと、人体図の未来というのは、本人の場所と子供の場所です。

これらのことから、「月干支」は未来が始まる場所と考えているのです。

南に行くと未来であり、究極は「死への方向」です。

人間が共通して向かうのは「死」です。

算命学では、南へ行くと「死」がまっていることになります。

仏教では「南無^{なむ}」というのは、南が無（死）と、解釈するようですが、中庸学ではそうは考えていません。

中庸学は「南無^{なむ}」というのは、悟られた方の法^{ほう}に帰依^{きえ}

すると解釈しているのです。

阿弥陀仏（仏陀と呼ばれる悟られた人）に帰依するという意味になるとのことです。

南無^{なむ}はインドの古代語で（ナーモ）とといいます。

ナーモは「帰依する」という意味です。

それゆえに、阿弥^{あみ}（アミー）と呼ばれる悟られた方に帰依するという意味になります。

アミーは仏陀^{ぶつだ}（お釈迦様）を意味します。

【初年】 53回目【大運法①】 **終わります**

つぎの授業 ⇒ 【初年】 54回目【大運法②】 です。